

尾崎一雄全集

第七卷

筑摩書房

尾崎一雄全集第七卷

昭和五十八年二月二十日初版第一刷發行

著 者 尾 崎 一 雄

發 行 者 布 川 角 左 衛 門

發 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

郵便番號 一〇一—九一

電話 東京(03)七六五一(營業)

東京(03)六七一一(編集)

振替 東京 六一四—二三

印刷 株式會社精興社

製本 株式會社鈴木製本所

落丁・亂丁本はお取替致します

目次

まぼろしの記	三
夢蝶	八
冬眠居日録	二七
夕顔	三九
春の色	五〇
なが雨	五九
口の滑り	六九
うしろ影	三三
退職の願ひ	四六
朝の焚火	五七

夕の焚火	二八〇
うぐひす	二九六
アルバム	三〇六
虫も樹も	三二五
約 束	三四四
槍と薙刀	三六三
花ぐもり	三八九
梅雨あけ	四〇〇
梅干爺さん	四一六
秋の終り	四三二

あの兒この兒……………四五五

先生を殴らうとした話……………四七三

楠ノ木の箱……………四八七

あとがき……………五二三

後記……………五三七

尾崎一雄全集 第七卷

まぼろしの記

一

挿木や根分けは勿論だが、種子から育てた木でも、十年経つと結構大きくなるものだ。敗戦の前年、病氣のため、長い東京生活を切り上げて郷里へ引込んだ私は、何もすることが無いので——といふより、何をする體力も氣力も失つてゐたので、窓からその邊の木や草をぼんやり眺めてばかりゐた。三、四年さうしてゐるうち、漸く病床から離れることが出来た。

草履をはいて、久しぶりに屋敷うちを歩いたときは、嬉しくて、宙に浮いてゐるやうな氣持だつた。そしてまた、足は實際、宙に浮いてゐるやうだつた。大丈夫だ、といふのについて歩く家人や子供の手前、宙に浮くやうな氣持は押しかくしたが、足の方はごまかせなかつた。私の足は、ふくらはぎは勿論、大腿も、膝の骨より細くなつてゐたのである。

だが私は、雨さへ降らなければ、必らず屋敷うちをうろついた。十分か十五分でもう疲れ、いつも敷いてある床にもぐり込んで一時間も二時間も休む。それが、慣れるにしたがつて、二十分、三十分の散歩に堪へるやうになつた。それにつれて、大腿やふくらはぎに、少しづつ肉がついてきた。私は少し慾が出てきて、それまで放りつばなしにしてゐた木や草に手を出し始めた。今から十二、三年前のことだ。その時分挿木をしたり、種子を播いたりした木が、もう大分育つてゐる。種類によつて遅速はあるが、今はとにかく一本の樹として存在を主張してゐる。

それらのいはば「戦後派」の木は、昔からの老木に入り交つて、活氣あふれた葉の色を見せてゐる。彼らは單に木であつて、植木ではない。三抱へもある玉樟の大樹を初め、直徑二尺以上のあけぼの梅その他、私が生れるずっと前からこの屋敷にあつた樹々に比べれば、全くものの數ではない。が、私はそれらの若い木に、特別な關心をもつてゐる。なぜなら、彼らは私が居なければ木にならなかつた筈だからだ。彼らに木としての生命を與へたのは私だ、と云へる。——少し大げさな云ひ方かも知れぬが、彼らは私の子供みたいなものだ。彼らのあるものとは、親木から剪り取られた小枝であり、あるものは、枝頭から落ちた小さな實だつた。けれども彼らの有つ木たる素因に縁として働きかけたのは私だ。私が適當に處理しなかつたら、彼らは枯枝となり、死種となつたらう。……かういふと、やはり大げさになるが、つまり私は、自分がいつたんは「死ぬかも知れぬ」と半分覺悟した病氣から立直つて、ひ弱いながら新芽をふき出した同じ時期に、木としてのスタートを切つた彼ら若木を、他人(?)としては見られぬ氣持があるのだ。多分、再生の喜びがさせる感傷なのだらう。

それはそれとして、彼ら若木どもの、この威勢の好さはどうだ。中でもひどいのが、枇杷だ。四本の

うちの一本は、屋敷の東側境界近くにあつて、隣家の畠の肥料を存分に吸ふためだらう、三間もの高さになり、枝葉をぎつしりと繁らせてゐる。他の三本と比べ、幹に對する枝の角度が小さいのは、成長の猛烈さを示すものだ。四年ほど前から、實をつけ出したが、實生のままのくせに、先祖がへりもせず、甘美な大きい實を澤山つける。

未だ私が寢てゐる時分、ある人が見舞に枇杷を一籠くれた。その實を窓から抛つた奴が、翌年芽をふいた。うまい枇杷だつたので、家人にいひつけそれらを適當な個所に移植させたのである。

それを見た近所の人たちは、厭な顔をして、「扱いでしまひなさい、屋敷うちに枇杷は不吉です。植ゑた人が死なないと實をつけないと云ひます」さう忠告してくれた。だが、私はそのままにしておいた。さういふ云ひつたへは私も知つてゐた。近所の人は、長患ひの私が知つてそんなことをする筈はないと思つたのだらうが、私は、いはゆる荷ぎ屋ではない。枇杷の結實期が遅いのをそんなふう云つたのだらうと解釋し、自分がこの幼木の實を食へるやうだつたら面白い、と思つただけだ。十年経つて私は生きて居り、枇杷の實を食つた。今年も青い實を大分つけてゐる。明日のことは判らぬが、やがて熟したその實を、多分食ふことになるだらう。

二

五月初旬のよく晴れた午前、私は家の北側の板塀添ひに、草むしりをしてゐた。梅、柿、肉桂、榎など大小さまざまの木が雜然と立つてゐる下に、葉蘭や茗荷が繁つてゐる。それに交つて、藪柑わぶかんが一尺二

尺とのび上つてゐる。こいつにはびこられてはたまらぬから、目のかたきにして引抜くのだが、たくましい地下莖を縦横に張りめぐらしてゐるので、根絶やしにするのは大變な仕事だ。

未だ朝露の残つてゐる葉蘭や茗荷の繁みをわけて藪枯退治をつづける私の耳に、女の聲が飛び込んだ。

「山根のお靜さんは、實家へ歸つたとよ」

「へえ、たうとう——」

「おテルさんもおテルさんだけんど、英太も英太だ」

向う三軒兩隣りと云つても、田舎のことで家そのものは離れてゐる。私方の上隣りの屋敷は二千坪もあらうか、その南側は私方と小道をへだてて長い石垣になつてゐる。石垣の上には東西に長く茶の木が植ゑられ、それが生垣になつてゐる。毎年五月になると茶摘みに近所の女達を頼む。それで年間自給自足のことだが、その茶摘みが始まつたのだ。

誰と誰なのかは、聲で判つた。北川ハツと鏑木ミヨ、ともに近所の細君だ。ハツは五十位、ミヨは四十二、三か。二人は、自分たちの居る石垣下の道を五六間いつた先の塀かげに私が居るとは知らず、山根英太お靜夫婦と酒部テルとのもつれについて聲高にしゃべる。黒舎の五月の、晴れた午前で、あたりは閑寂だ。すべては筒抜けである。四十と五十の、いはば古女房たちの言葉づかひは、この上なく露骨で、聞く方が大儀なほどだ。私は、一と休みしていい頃だつたので、立上つて腰をのばし、氣づかれぬやうにその場を去つた。

「藪枯がさかんに出てきた」

茶をのみながら妻に云つた。

「ああ、あの蔓草——。あれ、カラシの一種ですか」

「カラシぢやないさ」

「だつて、ヤブ茗荷、ヤブ柑子なんてのもあるでせう」

「違ふんだ。あいつがはびこると、竹藪さへ枯らして了ふと云ふ。つまり藪を枯らすほどの悪草といふわけだ」

「へえ」

「貧乏づる、垣通し、なんて異名もあるぐらゐで、餘ほどの嫌はれものなんだ。確かにあいつは、生活力極めて旺盛だから、退治するのは大變だな。君も見つけ次第引抜いてくれ」

云つてゐると、いきなり屋外有線放送のテーマ音楽が鳴り出した。いつも乍らボリュームが大きすぎる。向ひ合つての話も中絶した方がいいほどだ。

「久保山へ行つて居られる北川傳三さん、豚が逃げましたから至急お歸り下さい——繰り返します、久保山へ行つて居られる……」

「豚がまた逃げ出したんだ。傳三は山へ行き、おハツが隣りの茶摘みで、家はからつぽか」

「あ、お隣りでは茶摘みですか」

「おハツさんと鑄木のおミヨさんが、さかんにしゃべり乍ら摘んでたよ。今の放送で、おハツは慌てて駆け出したらう」

「この前も、近所の人たちがあの豚を一時間も追つかけ廻したんですよ」

「茶を摘みながら、例の山根英太と酒部テルのスクィンダルをさかんに討論して居た」

「面白いこと、云つてたでせう」

「英太の細君が子供を連れて實家へ歸つたいいきさつを詳しく話してゐた」

「へえ、たうとう別れ話ですか」

「酒部テルつてのは、大したものらしいね」

「あの人は、あれが病氣なんですよ。どうにもしやうがないらしいの。——でも、道で逢ふと、快活で愛嬌があつて、ちつともそんなふうには見えないけど」

「さうかね。さてもう少し——」と私は立上つた。

「もうお止めになつたら？　冷えちやひますよ」

「大丈夫だ」

さつきの場所へ行つてみると、茶摘みの二人は居なかつた。慌てて駆け出すハツのあとを、野次馬氣分でミヨも追つたのだらう。私は、藪枯の蔓を抜き、地下莖を引きちぎり乍ら、山根英太と酒部テルとの色戀沙汰について、ぼんやり考へてゐた。

酒部テルは四十位の後家。敗戦間際に戦死した亡夫との間に、男女二人の子供がある。田畑合せて一町二、三反といふ中農だつた。

女一人では當然手が廻らぬので、近所の人たちが時々手助けしてゐた。山根英太も暇をつくつては手傳ひに行つてゐたが、いつかテルとねんごろになつた。英太は二十幾つといふ若さだつたが、すでに隣村から二十前はたちの嫁を貰ひ、もう赤ん坊もあつた。だが、當時三十いくつだつた酒部テルに強く惹かれ、やがて、自宅よりテルの家で寝る方が多くなつた。

兩親はじめ、親類一統の強意見も、英太とテルには全く通じなかつた。

テルは亡夫の遺産たる田畑をつぎつぎと手離しては、英太の酒代にした。毎日、肉や魚を買つた。夜は早寝をし、朝はどこよりも遅く戸を開けた。

村人たちの評判は、勿論よくなかつた。物笑ひの種になつた。だが、當の二人、殊にテルは平然としてゐた。それどころか、いつも張りのある顔つきをしてゐた。

二人が山の蜜柑畑でむつまじく辨當を使つてゐるのを、通りかかつた二三人の青年が、奇聲を擧げて冷かした。するとテルは、

「口惜しけりや、眞似を試してみろ！」と大聲で怒鳴り返した。青年たちは、二の句がつけず、こそ／＼と逃げ出した。

さういふ關係がここ何年かつづいた擧句、英太の細君はつひにあきらめて實家へ戻つたといふのだ。

一應の結着を見たこの事件は、そも／＼から村人の話の種になつてゐたので、自然私も耳にはしてゐた。だが、英太もテルも、英太の若い嫁も、逢つたことが無いので——同じ村だからどこかですれ違ふぐらゐのことはあつたのだらうが、これがあの人かと思つたことは無い——深く氣にしたわけでもない。ただ、嫁さんが可哀さうだな、と無責任に思ふ程度だつた。

村の細君たちは、しかしこの事件には相當の關心を抱いてきたらしい。そのことは、時々催される細君たちの會合に私の妻が出席するのでよく判る。村——といふよりそれがさらに分れた部落單位で、宮講とか稻荷講とか白山講とかの名のもとに、茶飲話の集まりをする。現代ほど娛樂施設の豊富でなかつた頃の遺物で、さすがに最近も回数も減つたが、依然として續けられてはゐる。

ある細君は、不道德だとひどく憤慨する。かと思ふと、大變面白がつて、それからどうした、と膝をのり出すのも居る。「羨ましいね、あたしも亭主が死んだら——」とほんとに羨ましさうな聲を出すのも居る。批判がましいことは云はず、ただ熱心に聞いてゐる人もある。——さまざまだが、要するに無關心な人は殆んどゐないらしい。

嫁があきらめて、子供と共に實家へ戻つた、と聞いただけで、さういふ成り行きにともなふ條件があつたのか無かつたのか、あつたとすればどんなことで折合ひがついたのか、一切は不明だ。だから、何も云へないが、私としては、先づ第一にテル女の強さに感嘆に似た氣持を覺えるのだ。

「押し切つた奴が勝ちだ。おテルさんてのは豪傑だよ」

「あたしもさう思ひます。なか／＼出来ないことですよ」と妻が云つた。

「他人の思はくも迷惑も、全然問題にならないのだな」

「お嫁さんは可哀さうですけど——そこにはそのわけがあるかも知れない」

「何が何だか判らないけど……まあいいさ」

戸數六十ぐらゐの小さな部落ながら、これに類した事件は二三にとどまらない。色戀沙汰ばかりではなく、新聞の社會面で見ると種々雑多な事件が時々起る。それらは、妻をアンテナとして私につたはる。直接隣り近所とつながるのは妻だからだ。もつとも、このアンテナは感度が鈍いため、ニュースの鮮度は落ちるのがつねだが——。